



スギナ

春を告げるツクシは、シダ植物「スギナ」の胞子葉です。針金のような地下茎から次々に芽を出します。

丸い頭の先で天を突くようにして群れているツクシの姿は、なんともユーモラスです。

田鼠の 穴からぬつと 土筆^{つくし}かな

(小林一茶)

目 次

巻頭言	2
「振り返る・広げる」 教育研究所連絡協議会委員長 矢野 順子	
1 小さなころみ	3
「情報化社会をよりよく生き抜く児童生徒の育成」 情報モラル教育の充実に関する研究員	
2 学びの架け橋	4
「言語活動の充実を図る授業の工夫」 国語 プロジェクト研究員	
3 ある教室から	5
「学び合い、認め合う授業づくり」 教育指導課指導主事 宮坂 宗篤	
4 研究所だより	
① パワーアップ研修	6
② 学習指導法研修会	7
③ マナーアップ研修	8
④ 今年度の教育研究所事業を振り返って	8



振り返る・広げる



教育研究所連絡協議会委員長

矢野 順子



平成 26 年度は今後の教育の新たな方向性が示された年でした。例えば、「特別の教科 道徳」や小学校の外国語活動の中学年からの導入について、さらには、学習指導要領改訂の動きも始まった 1 年でした。その中で、新しい時代に必要となる資質・能力の育成に関して、「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」という学びの質や深まりの重視、課題の発見と解決に向けた主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）、そのための指導方法等の充実が必要とされています。

小田原市の教育を考えると今年度も様々な工夫がみられました。1 つめは、教育講演会です。8 月足柄下地区全教職員を対象に、日本ペップトーク普及協会の岩崎由純氏から「言葉のちから 無限大！」をテーマにお話を伺いました。課題やうまくいかないことは逆の視点からみてプラスの言葉におきかえることで、受け止め方が変わり、意欲がでてくるという内容でした。2 時間の講演がアツという間に終わり、会場は笑顔あふれるものとなりました。講演は言葉です。言葉を聴いて先生方は感動し、笑顔になりました。これは教員の使命である授業に生かすことができるものではないでしょうか。授業は子供たちのものです。子供たちが意欲的に取り組むような工夫がされ

ているだろうか。改めて見直す機会をいただきたいとも思いました。

次に教員である前に人として大切なマナーアップ研修も今年度初めて取り入れられました。電話の応対 1 つで相手の気持ちが変わる。これも言葉です。電話は顔が見えない関係の中で、言葉だけでコミュニケーションするものです。そう考えると言葉の大きさを感じるとともに、相手意識の視点をもって対応することは子供を見る目でも同じであると思います。どこの視点に注目するのかがポイントであり、子供を育てる力になると思います。

各校では校内研究を始め、様々な研修に参加し、主体的に学ぼうとする教師が増えています。しかし、学んだ後が大事です。何を学んだのかしっかりと振り返り、それをどう生かすか具体を考えなければ時間とともに忘れ去っていきます。また、研修は参加者 1 人だけのものではありません。各校の代表として参加している意味を踏まえて、校内に広げる役目も担っています。教員の学ぶ意欲が子供たちの成長につながることを願って一步一步前進をめざしていきましょう。



情報化社会をよりよく生き抜く児童生徒の育成



情報モラル教育の充実に関する研究員

中島 慶太（下中小学校） 加賀谷 元（報徳小学校）

鈴木 文栄（東富水小学校）

北川 誠（橘中学校） 池谷 二郎（白山中学校）

高度情報化社会といわれる現代、スマートフォンをはじめとする情報メディアツールは急激な進展を遂げ、児童生徒にとってインターネットは極めて身近なものとなった。それに伴い、メールや SNS 等は新たなコミュニケーション手段となっている。一方、インターネットに関わるトラブルや SNS によるいじめなどが社会的な問題として危惧されている。そのため、情報化の危険な一面を十分理解し、様々な情報に対し適切に対応しながらよりよく生き抜くための情報モラル教育の充実が求められている。このような社会的な背景のもと本研究に取り組むこととなった。

最初の研究会では、情報モラルに関する各校の実態や実情について情報交換を行った。各校とも情報モラルに関する指導は行われているものの、系統的なカリキュラムを作成し計画的に指導している学校はなかった。また、ネット上のトラブルは小中とも少なからずあることが分かった。私たちはまず、研究員一人一人が児童生徒を取り巻くネットトラブルの現状を正確にとらえ、情報モラル教育の内容や進め方を理解することが必要だと考えた。

そこで、教育指導課宮坂宗篤指導主事を講師に迎え、ネットトラブルの現状や対策についての情報を提供してもらった。以前は学校裏サイトやブログなどが問題となっていたが、最近ではスマートフォンの普及によりコミュニケーションアプリ「LINE」を介したトラブルが激増していることが分かった。LINE という閉鎖的空間でのいじめは見えにくく、発覚するころには問題が根深くなってしまうため、未然防止の取り組みが重要だということだった。情報モラル教育の理解については、神奈川県立総合教育センター川端啓明指導主事にご指導いただいた。情報モラルとは、情報化社会において適正な活動を行うための基にな

る考え方と態度であると定義づけられている。その指導を推進するためのポイントや情報モラル教材の類型、実践例についてもご指導いただいた。また、文部科学省から出されている「情報モラル指導モデルカリキュラム」を紹介していただいた。私たちは、これを基盤に小田原市の児童生徒の実態から情報モラル教育を構築していきたいと考えた。そのため、情報モラルに対する意識やインターネット利用の実態について研究員所属校の児童生徒及び保護者にアンケート調査を行うことにした。

その結果、約9割の児童生徒がインターネットに接続できる機器を所持し、中学校においては約半数の生徒がメールや LINE を使っていることが分かった。学校による差はあるものの、情報モラルにかかわるトラブルや問題も浮き彫りになった。

そこで、モデルカリキュラムをもとに道徳（小4）での授業提案を加賀谷研究員が行った。受け手の気持ちを考えた情報発信についての授業は、間接的なコミュニケーションである LINE 上でのトラブルを題材としたものだった。パソコンを活用して提示した LINE をイメージした資料は、LINE を知らない児童にとってもわかりやすく興味をひくものだった。温かい雰囲気の中で授業は進んでいった。児童は、「ケンカにならないようにいいことを書く。」「相手をいやな気持ちにさせる言葉を書かない。」など今後のコミュニケーションの取り方について考えを伝え合っていた。

今後は他教科における授業の在り方も考えていく必要性を感じている。情報モラル教育を推進していくための課題は多くあるが、今後も情報化社会でよりよい判断をし、インターネットを活用できる児童生徒の育成を目指して研究を進めていきたいと思う。

言語活動の充実を図る授業の工夫

国語 プロジェクト研究員

岩立 裕子（芦子小学校） 富田 涼子（桜井小学校）

諸星 優子（報徳小学校）

杉崎 美穂（鴨宮中学校） 山口 清子（白山中学校）

はじめに

「言語活動」がさまざまな教科で重視されているが、その中で問題点として、自分の考えばかりを主張し合って、話し合いが形式的になってしまっているのではないかと危惧される面もある。そこで、友達の意見をしっかりと聞き、それから自分の考えをより深めていけるような学習の手立てや指導法を研究していこうと考えた。

1 単元を貫く言語活動

～場面読みからの脱却～

文学的文章や説明的文章の学習を進めていく中で、従来は場面ごとに読み取りを行うことが多かった。しかし、「単元を貫く言語活動」を意識するならば、「場面読み」を取り払って、一つのテーマのもとに読み取りを深めていくという方法を研究していこうと検討を重ねた。

①小学校での実践

「ごんぎつね」での感想交流の実践を行った。さまざまな場面のごんの気持ちを読み取り、自分が考えたことを話し合う活動が、「読み取りシート」を活用して行われた。

時系列で読み進めていくのではなく、「いたずらごん」「ごんの気持ちの変化」「兵十を思うごん」「最後の場面のごん」など、あるテーマのもとに本文を深く読み込んでいくという試みである。

児童は、はじめは自分の感想を読むだけであったが、友達の感想を踏まえて、最後には付け加えて発表していた姿もあり、今年度初めての授業実践として、示唆に富んだ授業となった。

②中学校での実践

「走れメロス」での実践を行った。物語の始めから詳しく読んでいくという手法ではなく、「登場人物」「あらすじ」「人物像」「表現の効果」などの視点でグループ活動を中心に何回も本

文に立ち返る方法をとった。生徒たちがそれぞれ読みを深めた結果として、物語に描かれた事件を報じる新聞を作る活動をした。

生徒たちは登場人物の心情の変化や人物像などについての意見を交換しながら、相互にアドバイスをして個人の新聞づくりに取り組んでいた。

2 つけたい力の明確化

～言語活動設定の理由の明確化～

言語活動を通してつけたい力を育てていくために、単元の中で設定した言語活動が適切であるか、効果的なものとして位置付けているかを考える必要がある。そこで、学習指導案に「言語活動設定の理由」を明記して、授業者が「つけたい力」を明確に意識していけるように心がけた。

学習指導案の形式についてはまだ試行錯誤をしている状態であるが、より分かりやすく、学習の目標がはっきりと示されるよう、今後とも検討を重ねていきたい。

3 小中の連携

～9年間を見通した活動～

小中相互の理解と連携の大切さを実感したことから、小学校で培われた力が、中学校1年生の段階でリセットされないように、また、義務教育9年間を見通した指導をしていくために、小学校と中学校の指導事項をお互いに意識しながら研究を進めていく。

おわりに

今年度は、研究の方向性をはっきりさせていくことを中心に話し合いや授業実践が行われた。それぞれの研究員が現在課題としていることや、児童・生徒の実態などを踏まえた指導法の検討など、有意義な話し合いができたと思われる。次年度はよりテーマを明確にして、研究を深めていきたい。



学び合い、認め合う授業づくり

教育指導課指導主事

宮坂 宗篤



中学校3年生の数学の授業を参観した
ときのことを紹介します。

「辺の長さが2倍の三角形を、いろい
ろな方法で作図しよう」という内容でし
た。先生は授業の冒頭で「仲間と話し合
う中でいろいろな考えを出してほしい」
と全体に伝えました。

授業の前半は、まず生徒自身で作図の
方法を考える時間でした。私が立つすぐ
近くの席に、課題には取り組んでいるも
の、少し落ち着かない様子の生徒がい
ました。私は、ボソッと何かをつぶやき、
周りの生徒に何かを聞こうとしているそ
の生徒のことが気になりました。

その後、4人グループで、いろいろ
な作図方法を出し合う話し合いが始ま
りました。全体に目を向けると、どのグ
ループにも、積極的に自分の考えを発言
できる生徒がいて、作図の方法がいくつ
も挙げられていきます。気になった生徒
のグループを見ると、その生徒が控えめ
に、皆に何かを伝えようとしていました。
しかし、考えを整理できず、伝えること
に苦労しているようでした。そこへ、さ
りげなく先生が回ってきて寄り添いまし
た。先生は、その生徒の考えをゆっくり
聞きだしました。そして、生徒の発する
単語をつなぎ合わせ、最後にそっと本人
の考えをグループに伝えました。周りの
仲間は「そういうことか」と理解し、本

人は大きくうなずきました。自分の考え
が皆に伝わったことが何より嬉しそうで
した。先生のタイムリーで適切な関わり
から生徒の考えが共有され、学びを深め
ることができた瞬間でした。

授業の後半、4人組で話し合ったこと
をクラス全体に向けて発表する活動では、
それぞれのグループから発表される考え
に対し、「おー」という歓声や「なるほど」
という声とともに自然と拍手も生まれて
いました。自分の考えを全体の前で表現
する喜びを感じ、聞きたいことを先生や
周りに恥ずかしがらずに聞けるという安
心した雰囲気の中で、クラスが一つにな
って学んでいる姿を見ることができまし
た。

授業後の先生方の研究会では、参加す
る先生方皆で、生徒一人一人の学びの姿
や反応を具体的に予想し、こうなってほ
しいという願いも含めて話し合いが行わ
れていました。生徒の姿をきちんととら
え、それをどのように伸ばしていくかを
イメージし話し合っている先生方の様子
は非常に頼もしく感じました。





パワーアップ研修を終えて ～この一年間で身に付いたパワーとは～



意欲的な中堅教員、若手教員の「授業力」を中心としたパワーアップをねらいとする研修です。研究所長と研修相談員2名が研修を担当し、今年度は、小学校16名、中学校7名（社会1、数学1、理科1、保健体育4）、合計23名が授業の見直し、改善に取り組みました。

1 身に付けたいパワー

研修者のテーマに多く見られるキーワードは、「関わり合い」「学び合い」です。これは、授業で「子どもたちが学び合い、一人ひとりが自分の思いや考えを広げたり、深めたりできる」ようにする力を高めたいという教師の願いだと思います。また、この他に「主体的に」「自ら」「意欲的に」など「主体性の育成」を意図する文言も随所にあります。

2 身に付いたパワーは～成果と課題～

授業実践を中心とした年5回の個別研修、小・中別に代表者による授業研究等を行った全体会等を通して、「どのような力が身に付いたのか」（成果）を、課題も合わせて実施報告書から紹介します（抜粋、要約）。

- ・ 友達の考えを自分の考えと比べることで、考えを広げたり深めたりする児童が増えた。
- ・ グループで伝え合い、学び合う姿が見られ、人と関わる力、表現する力が養われるようになった。
- ・ ペアや小グループ、発問の工夫を行い、話し合いの内容が深まるようになった。
- ・ 話し合いが焦点化し、「読みの視点」を進んで生かそうとするようになった。
- ・ 体育が「好き」と答える子どもが増え、⁶笑顔ですばやく行動するようになった。

このことは、研修者が、授業の改善に熱い思いを持って真摯に取り組んだ成果といえるでしょう。しかし、次のような課題も挙がっています。

- ・ 児童への効果的な手立てを講ずることができていない。様々な手立てを持てるように。
- ・ 教師の思いだけで授業をするのではなく、子どもを見る目の幅を広げるようにしたい。
- ・ グループ活動の必要性や内容の見直し、児童が主体となる話し合いの進め方など。

3 今後に向けて

授業を参観する中で、改めて次のことの重要性を痛感しています。

- 学習指導要領解説（文部科学省）を行間も含めてしっかり読み込み、そこから単元や本時の目標（付けたい力）を明確にとらえ、具体的な内容を肉付けしていくこと。
- 「主体的な学習とは？」「学び合いとは？」をもう一度問い直し、それを実現するための「授業の構想」「手立ての工夫」等について、吟味をしていくこと。

この研修を一つの契機として、教師の「専門性」に一層磨きをかけ、子どもたちの多様な学力（主体性や学び合う力を含む）を育むために、全力投球することを心から願っています。

（文責 大場 得信 研修相談員）





子どもに力をつけるための指導力向上をめざして ～学習指導法研修会～



全国学力・学習状況調査の結果をふまえ、国語、算数・数学の学習指導法について研修を深め、指導力向上をめざした研修です。どちらの部会も、1回目は講師の先生の講演、2回目は授業研究の後に研究協議と実践報告を行いました。講師の先生からは、授業改善のために何を大事にすべきなのか、明確な話を聞くことができ、各自の実践に活かすことができました。研修参加者が取り組んだ「実践報告集」を各学校に送付しますので、今後の授業づくりや校内研究等にお役立てください。

<国語部会>

講師：杉本 直美先生

(国立教育政策研究所

学力調査官・教育課程調査官)

子どもに付けたい力が着実に身につく

授業づくり

★全国学力・学習状況調査の結果の活用

～個別の調査問題について分析を！～

正答率を見るだけでなく、各設問ごとに、どの子ができていなかったのかを把握し、指導に活かしていく。目の前の児童生徒の誤答の状況を詳しく分析することが、次の授業のスタートになる。

★国語の授業づくりのチェックポイント

① 学習指導要領の指導事項（付けたい力）が明確に位置付けられているか。

② 付けたい力を効果的に指導するための言語活動が設定されているか。

- ・ 付けたい力が効果的に身に付く言語活動
- ・ 児童生徒が学習に一層興味をもつ言語活動
- ・ 児童生徒が学習の見通しをもち、主体的に取り組む言語活動
- ・ 実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本となる国語の能力が身に付く言語活動

③ (特に読むことの指導において) 読書に広がる学習になっているか。 日常的な読書活動と、国語の授業を関連付けることが大切。

*** 子どもにどんな力をつけたいのかを明確にし、言語活動を通して付けたい力を指導しましょう！**

<算数・数学部会>

講師：池田 敏和先生（横浜国立大学教授）

数学的思考力を育てる授業づくり

★児童生徒が考えられる状況にあるか

問題を解決する過程に誰もが参加できるように、自力解決を小刻みに区切り、何をどうすればよいかを共有する。子どもの実態に応じて、自力解決とペア学習を適宜設定する。

★教師が子どもの考えをしっかりと理解しているか

子どもが間違えたとき、教師は「失敗」ととらえるか、「重要な検討課題」ととらえるのか。「失敗」は、うまくいかなかった結果を振り返らずそのままにして捨て去ること。「検討課題」は、うまくいかなかった結果を振り返り、「次の活動に活かせる何か」がそこにあるはずだ」と考え、それを特定して次に備えること。子どもの素朴な考えを解釈し、一人ひとりの考えを大切にする授業づくりが大事。

★思考を深めるための

「学び合いのバランス」

自分の考えがないと、学び合いは深まらない。何か、きっかけがないと、自分の考えは持てない。1人で考える→みんな（ペア、グループ、全体）で考える→1人で考えるなど、子どもの実態をつかみながら、学び合いのバランスを考える。

★振り返りを大事に！

授業の振り返りでは、「何がわかったのか」「思考過程」「自分自身の変容」を振り返る。



マナーアップで信頼関係づくり ～初年度のマナーアップ研修会を終了して～

「自らを振り返り、気づき、マナーアップへの意識を高める」ことを目的として、新規に立ち上げたマナーアップ研修会。6月の集合研修は職員課職員の講話と演習というプログラムでしたが、「教員になってこういう研修は初めて」と言いながら笑顔で参加する姿がありました。また、その後に行われた各学校での研修は、グループ協議や演習を通して自分を振り返り、互いに考え合うもので、演習に戸惑いながらも熱心に取り組む姿が印象的でした。一定のマニュアルを知っておくことは良識ある社会人として必要であり、さらに、相手への思いやりをベースに、自分で判断して対応することが大切と確認し合いました。

研修後、いくつかの学校から、「電話の受け方等で気をつけて応対する姿が見られるようになった」との声をいただいています。

「一本の電話が危機を生み、一本の電話が元気を呼ぶ」という言葉があります。マナーある対応は信頼度を高めます。信頼関係がつくれれば、ともに手を携えて子育てにあたることができます。また、ある校長先生のことは、「相手への思いやりがマナーアップの原点、それは子どもへの関わり」の原点でもある」も然り、教職員として心に留めておきたいことです。

次年度も引き続き、マナーアップに努めていくことができるよう、日ごろからの心掛けとともに、研修の充実をめざします。



今年度の教育研究所事業を振り返って

小中学校理科副読本「小田原の自然」 ～部分改訂を行いました～

「小田原の自然」は、平成9年3月に発刊され、多くの小・中学生に活用されてきました。その後も、平成18年度・19年度に大幅な改訂を、さらに、今年度は部分改訂を行いました。来年度の小学校4年生から、新しい「小田原の自然」が配布されます。表紙は、今までのレイアウトに、「大地」を表す黄色いラインが加わりました。中学校にも学校用に送付しますので、ぜひ、手にとってご覧ください。

「小田原の自然」活用講座（自然観察会） ～100回目の開催を迎えました～

今年度は、雨天のため残念ながら2回中止になってしまいましたが、234名（参加予定者を含む）の方にご参加いただきました。来年度は、夏休み（8/1）にも観察会を行います。毎回、新しい発見に出会える自然観察会。授業に活かせることもたくさんありますので、教職員の参加をお待ちしています。

共同研究「幼保・小の連携に関する研究」

1月14日に東富水幼稚園で公開研究会を行いました。公開授業では、小学校と園の先生が協力して、年長の子どもたちに向けて、小学校入学への期待感を膨らませられるような活動を行いました。公・私立の幼稚園・保育園の先生、小学校の先生など約50名の方にご参加いただきました。2年間の研究のまとめとして「共同研究集録」を各学校に送付しますのでご覧ください。

<参加者の声>

- ・幼保・小の職員が意見を交わし交流できる場がこれからもっと増えるとよいと思いました。年長児が小学校への期待をもって進めるように、今回のような取り組みが増えるとよいと思います。
- ・幼保・小の連携の大切さがわかった。互恵性のある交流をめざす必要性を感じた。

*「情報モラル教育の充実に関する研究」「全国学力・学習状況調査の活用に関する研究」「学校情報の発信に関する研究」は1年目です。来年度も継続します。

